

友人関係における第一印象とその後の印象の変化について

高橋 優希^{*1}・齊藤 勇^{*2}

First Impressions and Subsequent Changes of Impressions in Friendships

TAKAHASHI Yuuki and SAITO Isamu

Abstract

The purpose of this study was to examine the first impressions seen in friendships, and the subsequent changes in impressions after passage of time. The first impressions and the current impressions were simultaneously surveyed by comparing cases with “bad first impression, but is a good friend now” and “good first impression, but is not friendly with now.” The results showed that change in impressions influenced the relationship between friends. Gender differences were observed in the results. In evaluations of male friends, there was change in first impressions and current impressions regarding earnestness and kindness, while evaluations of female friends, there was change regarding activeness and kindness.

[Keywords] impression formation, first impressions, friendships

問 題

日常生活を送る中で私たちはたくさんの人々と出会い、関わりを持ちながら生活している。その中で、子どもの頃から現在にいたるまで交流のある人もいれば、昔は仲が良かったのにも関わらず、今は連絡先すら知らない人もいる。また、最初からあまり関わりを持たなかった人もいれば、最初は関わりを持っていなかったものの次第に仲良くなり現在にいたるまでの人もいる。その違いは一体どこにあるのだろうか。最初出会ったころ形成された印象とその後の印象が変わり、相手に対する評価が変化したことが大きく影響を及ぼしているためこのようなことが起きると考えられる。

印象形成について山田・箱田（2000）は次のように説明している。印象とは、「ある人物の断片的な情報からその人の全体像を作り上げる認知的過程であり、私たちは無意識にかつ日常的にこの認知的過程を行っており、他者の印象を形成する過程には実に多くの要因がある」としている。印象形成については、「刺激人物の持つ相貌特徴などの物理的属性のみならず、知覚者の内面的側面（パーソナリティなど）やその他の文脈的要因（場所、場面など）も考慮に入れなければ語れない」としている。山田・箱田（2000）が述べているように印象形成にはさまざまな要因が影響していると考えられる。

印象形成に関しては過去にさまざまな研究が行われている。梶田（1966）は対人認知の過程で自己意識が規定因としてどのような影響を与えるかを検討している。その中で梶田（1966）は自己意識と対人関係の関連性を見る上で重要なのは自己評価であるとし、自己評価のレベルが異なれば、相手に対して感じる魅力度が異なってくるということを明らかにした。また、梶田（1967）は自己評価の高い人は自己評価の低い人に比べて相手に魅力を感じる度合いが大きいという結果を報告している。自己評価の低い人は高い人に比べて他者から受容られていないと感じやすく、また低い評価を与えられたと認知しやすいので、他者に対する態度も非好意的、非受容的になりやすいと解釈できるとしている。

* 1 立正大学大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻修士課程

* 2 立正大学名誉教授

しかしながら、永房（2008）は自己評価が高い人は他者からの評価に敏感で、多くの場合他者の客観的な評価に比べて自己の主観的な評価がはるかに高く、他者からの評価が脅威に感じられる。その結果、好ましい自己評価を維持しようとして他者に対して負の感情（怒りや嫌悪）を抱くとしている。また、鹿内（1978）は日本人の特徴として、自分自身に関して高い評価をすることを避け、控え目な帰属をする傾向にあることを実験により明らかにし、日本人は自己卑下的帰属傾向にあることを確認している。

吉村（1987）は第一印象の残りやすさについての検討を行っている。ある人物について二つの情報（ポジティブ・ネガティブ）をもとに印象を形成させ、その後その情報が誤りであることを伝えた。それによってターゲットに対する印象を変化させ、変化の度合いを比較した。その結果、ネガティブな情報を与えられた方がポジティブな情報をあたえられた方より印象に変化が少なく、印象が残りやすかったとしている。

吉川（1989）はネガティブな評価の印象（悪印象）はポジティブな評価の印象（好印象）よりも覆しにくく、時間が経過しても持続しやすいことを実験により明らかにしている。また、印象の残りやすさについて、対人認知の評価の次元では、ポジティブな行動が最頻的であり、最頻的ではないネガティブな行動は行為者の独自の傾性を表すものとしてより重視されることを示唆している。

豊田（1998）は大学生を対象に「女性から嫌われる男性及び女性」「男性から嫌われる男性及び女性」の特徴を3つずつ自由記述するという調査を行っている。「女性から嫌われる男性」の特徴としては“不潔”“しつこい”、「女性から嫌われる女性」の特徴として、“自分勝手・わがまま”“異性の前での態度が違う”が上位項目としてあげられ、「男性から嫌われる男性」の特徴としては“自分勝手・わがまま”“暗い”、「男性から嫌われる女性」の特徴としては“自分勝手・わがまま”“うるさい・おしゃべり”が上位項目としてあげられたとしている。さらに、豊田（2000）は大学生を対象に「女性から好かれる男性及び女性」「男性から好かれる男性及び女性」の特徴を同様の調査により明らかにしている。「女性から好かれる男性」の特徴としては“やさしい”“かっこいい”、「女性から好かれる女性」の特徴としては“やさしい”“明るい”が上位項目としてあげられ、「男性から好かれる男性」の特徴としては“おもしろい”、「男性から好かれる女性」の特徴としては“かわいい”“やさしい”があげられたとしている。

これらの研究が示唆しているように印象形成過程に影響を及ぼす要因は様々であるが、今まで印象の変化に対しそれら要因がどのような影響を及ぼしているのかについての研究は少ない。また、自己意識と自己評価が相手の印象を形成する際に影響を及ぼすのかについての研究も少ない。そこで本研究では印象の変化に及ぼす要因を探るとともに自己意識・自己評価との関連性を検討していこうと考えた。そこで本研究では、友人関係における第一印象とその後の印象の変化について検討する。また、自己意識や自己評価によって差が見られるのかについても同様に検討を行うことを目的とした。

一般的に、現在親しくしている友人は最初からずっと仲が良い。または、現在あまり親しくしていない友人は始めから仲が良くなかったと思われやすい。しかしながら、実際には第一印象は悪かったものの現在になっては良い印象に変わり仲が良くなったという友人もいると考えられる。反対に第一印象は良かったものの次第に印象に変化が現れ、親しくなくなった友人もいると考えられる。

本研究を進めるにあたり、次のような仮説をたてた。

仮説1) 第一印象と現在の印象には変化がある。

仮説2) 第一印象と現在の印象には変化があるが、そこには性差がある。

仮説3) 自己意識・自己評価の高低と印象の変化には関連がある。

方 法

大学生を対象として、質問紙調査を実施した。

以下に調査対象者、調査の実施方法、質問紙の構成を記す。

調査対象者

調査対象者は、都内の私立大学で「心理学」の講義を受講していた学生132名（男性51名、女性80名、不明1名）、平均年齢19.21歳であった。

調査時期

2013年7月上旬に行った。調査は授業内に配布し回答してもらった後回収を行った。

質問紙の構成と調査方法

フェイスシートでは、年齢・性別の記入を求め、以下のような質問紙により調査を行った。

1. 自己意識・自己評価尺度

自己意識を測定するため、菅原（1984）を参考に独自に作成された9項目、自己評価を測定するため、山本・松井・山成（1982）を参考に独自に作成された6項目の計15項目を用いた。

2. 印象評定

友人間の第一印象と現在の印象をそれぞれ測定するための項目として、橋本・内藤・加藤（2007）、がおこなった研究を参考に30項目を独自に作成した。

3. 評定方法

本調査では、上記を記載した質問紙を配布し、回答を求めた。自己意識と自己評価を測定する項目は1点（あてはまらない）、2点（あまりあてはまらない）、3点（どちらでもない）、4点（ややあてはまる）、5点（あてはまる）の5件法を用いた。友人の印象評定は各質問に最も当てはまる友人を一人思い浮かべてもらい、その人と出会ったときの「第一印象」と、しばらく経ってからの「現在の印象」をそれぞれの形容詞対に対し、3点を中性点（どちらでもない）としてどちらに偏っていると思うかを1点（とても）、2点（やや）、3点（どちらでもない）、4点（やや）、5点（とても）の中から最もあてはまるものを回答欄に記入してもらった方式をとった。

結 果

1. 第一印象とその後の印象の変化

(1) 第一印象は悪かったが、現在親しい友人における因子構造と信頼性の検討

132名の回答者のうち不備のあったものを除いた結果、有効回答は120名であった。そして、印象評定の30項目に対し、1回目の因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、スクリープロットを検出した。3因子で30項目の全分散を説明する割合が50.23%であったため、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子と仮定しての2回目の因子分析を行った。その結果、2回の因子分析により3因子を抽出することができた。因子パターンと因子間相関を表1に示す。

第1因子は、15項目で構成され、「17. 消極的な～積極的な」、「10. にぎやかな～静かな」、「8. 無口な～おしゃべりな」など、にぎやかで積極的な内容の項目が高い負荷量を示していたため、「積極さ第一印象」と命名した。

第2因子は、7項目で構成され、「9. まじめな～ふまじめな」、「16. 無責任な～責任感のある」、「28. きちんとした～だらしない」など、まじめで誠実なイメージの項目が高い負荷量を示していたため、「まじめさ第一印象」と命名した。

第3因子は、6項目で構成され、「6. 厳しい～やさしい」、「26. 暖かい～冷たい」、「15. 親切な～意地悪な」などやさしくあたたかいイメージの項目が高い負荷量を示していたため、第3因子を「やさしさ第一印象」と命名した。

表1. 第一印象が悪かったが、現在親しい友人の因子分析結果と因子間相関、*M*、*SD*、 α 係数

	積極さ第一印象	まじめさ第一印象	やさしさ第一印象	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
問17 消極的な～積極的な	.81	-.15	-.07			
問10 にぎやかな～静かな	-.73	-.10	.27			
問8 無口な～おしゃべりな	.69	.15	-.30			
問19 控えめな～でしゃばりな	.68	.13	.14			
問2 陽気な～陰気な	-.68	-.13	.12			
問20 小心な～大胆な	.68	-.01	.26			
問18 外交的な～内向的な	-.66	-.04	.12			
問30 たくましい～弱弱しい	-.65	.23	-.15	3.24	.57	.91
問21 穏やかな～はげしい	.60	.29	.15			
問29 元気な～病弱な	-.59	.13	.08			
問12 臆病な～勇敢な	.57	-.36	.25			
問5 派手な～地味な	-.54	-.25	.04			
問4 感情的な～理性的な	-.53	-.17	.03			
問24 冷静な～情熱的な	.52	.23	-.09			
問22 個性のない～個性的な	.43	.05	.01			
問9 まじめな～ふまじめな	.08	.73	.03			
問16 無責任な～責任感のある	.10	-.71	-.17			
問28 きちんとした～だらしない	.07	.71	.06			
問14 不誠実な～誠実な	.10	-.60	-.14	3.15	.58	.85
問3 勤勉な～怠惰な	.12	.59	-.07			
問27 慎重な～軽率な	.24	.59	.04			
問23 大人っぽい～子どもっぽい	.20	.42	-.03			
問6 厳しい～やさしい	-.02	.07	-.79			
問26 暖かい～冷たい	-.28	.02	.61			
問15 親切な～意地悪な	-.15	.40	.59	2.71	.63	.79
問11 素直な～強情な	-.18	.26	.58			
問7 強気な～弱気な	-.40	.03	-.53			
問1 短気な～気長な	-.17	-.18	-.46			
因子間相関	積極さ第一印象	まじめさ第一印象	やさしさ第一印象			
	積極さ第一印象	—	.39	.30		
	まじめさ第一印象		—	.21		
	やさしさ第一印象			—		

因子分析によって抽出された3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「積極さ第一印象」の下位尺度得点は、 $M=3.24$ 、 $SD=.57$ であった。「まじめさ第一印象」では、下位尺度得点は $M=3.15$ 、 $SD=.58$ となった。そして、「やさしさ第一印象」の下位尺度得点は $M=2.71$ 、 $SD=.63$ となった。下位尺度毎の内的整合性を検討するために各下位尺度の得点のCronbachの α 係数を算出したところ、「積極さ第一印象」で $\alpha=.91$ 、「まじめさ第一印象」で $\alpha=.85$ 、「やさしさ第一印象」で $\alpha=.79$ と十分な値が得られた。なお、第一印象についての分析において得られた因子をもとに現在の印象についても同様の分析を行った。その結果、「積極さ現在」は、 $M=3.49$ 、 $SD=.49$ 、 $\alpha=.83$ となった。「まじめさ現在」は、 $M=3.31$ 、 $SD=.62$ 、 $\alpha=.85$ となった。「やさしさ現在」は、 $M=3.75$ 、 $SD=.58$ 、 $\alpha=.73$ であった。

(2) 第一印象が悪かったが、現在親しい友人に対する第一印象と現在の印象の差

第一印象が悪かったが、現在親しい友人に対する第一印象と現在の印象の差を検討するために、因子分析で得られた下位尺度を用いて *t* 検定を行った。その結果を表2に示す。第一印象は悪かったが、現在親しい友人に対する評価は、「積極さ」($t(119)=4.96$, $p<.001$)、「まじめさ」($t(119)=5.27$, $p<.001$)、「やさしさ」($t(119)=12.42$, $p<.001$)のすべてにおいて第一印象より現在の印象のほうが有意に高い得点を示した。特に「やさしさ」においては第一印象はマイナスの評価だったが現在の印象ではプラスの評価に変わっていた。第一印象は悪かったが、現在親しい友人に対しては「やさしさ」が第一印象と現在の印象の間で最も大きく変化していた(図1)。

表 2. 第一印象は悪かったが、現在親しい友人に対する印象の変化 (N=119)

	第一印象		現在の印象		t値
	M	SD	M	SD	
積極さ	3.24	.57	3.49	.49	4.96***
まじめさ	3.15	.58	3.31	.62	5.27***
やさしさ	2.71	.63	3.75	.58	12.42***

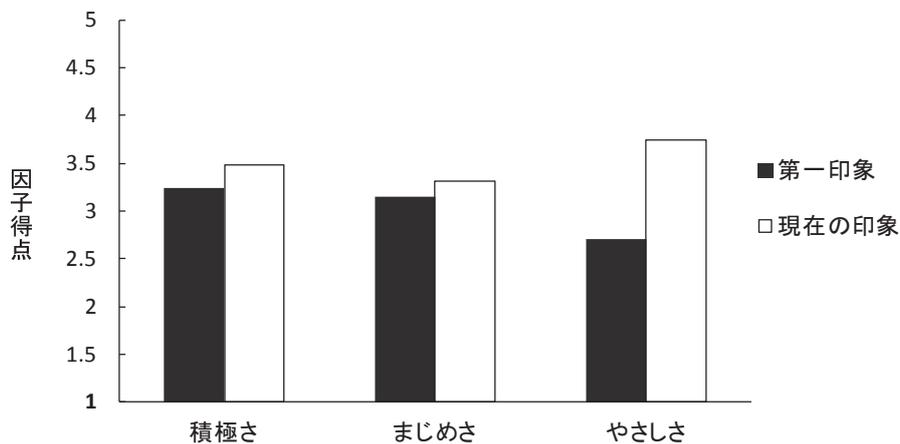
 $p < .001$ 

図 1. 第一印象は悪かったが、現在親しい友人 印象ごとの平均値の比較

(3) 第一印象は良かったが、現在親しくない友人における因子構造と信頼性の検討

132名の回答者のうち不備のあったものを除いた結果、有効回答数は120名であった。そして、印象評定の30項目に対し、1回目の因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、スクリープロットを検出した。3因子で30項目の全分散を説明する割合が46.09%であったため、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで、3因子と仮定しての2回目の因子分析を行った。その結果、2回の因子分析により3因子を抽出することができた。因子パターンと因子間相関を表3に示す。

第1因子は、11項目で構成され、「30. たくましい～弱弱しい」、「10. にぎやかな～静かな」、「17. 消極的な～積極的な」などににぎやかで積極的な内容の項目が高い負荷量を示していたため、「積極さ第一印象」と命名した。

第2因子は、7項目で構成され、「27. 慎重な～軽率な」、「3. 勤勉な～怠惰な」、「9. まじめな～ふまじめな」など、慎重でまじめなイメージの項目が高い負荷量を示していたため、「まじめさ第一印象」と命名した。

第3因子は、6項目で構成され、「16. 無責任な～責任感のある」、「1. 短気な～気長な」など、気長で責任感のあるイメージの項目が高い負荷量を示していたため、「責任感第一印象」と命名した。

因子分析によって抽出された3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「積極さ第一印象」の下位尺度得点は、 $M=3.15$ 、 $SD=.55$ であった。「まじめさ第一印象」の下位尺度得点は、 $M=3.20$ 、 $SD=.54$ となった。そして、「責任感第一印象」の下位尺度得点は、 $M=3.39$ 、 $SD=.54$ となった。下位尺度毎の内的整合性を検討するために各下位尺度得点のCronbachの α 係数を算出したところ、「積極さ第一印象」で $\alpha=.82$ 、「まじめさ第一印象」で $\alpha=.77$ 、「やさしさ第一印象」で $\alpha=.74$ と十分な値が得られた。なお、現在の印象についても同様の分析を行った。その結果、「積極さ現在」は、 $M=3.36$ 、 $SD=.56$ 、 $\alpha=.86$ となった。「まじめさ現在」は、 $M=2.83$ 、 $SD=.56$ 、 $\alpha=.82$ となった。「責任感現在」は、 $M=3.01$ 、 $SD=.71$ 、 $\alpha=.74$ であった。

表3. 第一印象は良かったが現在親しくない友人の因子分析結果と因子間相関、M、SD、 α 係数

	積極さ第一印象	まじめさ第一印象	責任感第一印象	M	SD	α
問30 たくましい～弱弱しい	.70	.21	.06			
問18 外交的な～内向的な	.63	.01	-.04			
問19 控えめな～でしゃばりな	-.62	.24	.02			
問10 にぎやかな～静かな	.62	.03	.15			
問7 強気な～弱気な	.58	.11	.24			
問17 消極的な～積極的な	-.55	.06	.23	3.15	.55	.82
問2 陽気な～陰気な	.54	.07	-.02			
問20 小心な～大胆な	-.52	.19	.16			
問5 派手な～地味な	.49	-.06	.17			
問24 冷静な～情熱的な	-.36	.35	-.12			
問13 頼りない～頼もしい	-.35	-.13	.29			
問27 慎重な～軽率な	.02	.79	.08			
問28 きちんとした～だらしない	.19	.65	-.11			
問3 勤勉な～怠惰な	.04	.52	-.01			
問9 まじめな～ふまじめな	.06	.50	-.11	3.20	.54	.77
問21 穏やかな～はげしい	-.41	.43	-.14			
問23 大人っぽい～子どもっぽい	-.25	.42	-.25			
問22 個性のない～個性的な	-.26	.38	.17			
問16 無責任な～責任感のある	.03	-.02	.67			
問1 短気な～気長な	.16	.09	.64			
問14 不誠実な～誠実な	.11	-.17	.63	3.39	.54	.74
問25 不潔な～清潔な	-.05	-.07	.58			
問15 親切な～意地悪な	.13	.31	-.43			
問6 厳しい～やさしい	-.03	.11	.39			
因子間相関	積極さ第一印象	まじめさ第一印象	責任感第一印象			
	積極さ第一印象	—	-.23			
	まじめさ第一印象		—			
	責任感第一印象			—		

(4) 第一印象は良かったが、現在親しくない友人に対する第一印象と現在の印象の差

第一印象は良かったが、現在親しくない友人に対する第一印象と現在の印象の差を検討するために、因子分析で得られた下位尺度を用いて t 検定を行った。その結果を表4に示す。

第一印象は良かったが、現在親しくない友人に対する評価では、「積極さ」($t(115) = 3.63, p < .001$)において第一印象より現在の印象のほうが有意に高い得点を示し、良い方向に変化したことを示した。一方、「まじめさ」($t(115) = 4.99, p < .001$)、「責任感」($t(115) = 4.86, p < .001$)においては第一印象より現在の印象のほうが有意に低い得点を示した。特に「まじめさ」においては第一印象はプラスの評価だったが現在の印象ではマイナスの評価に変わっていた。第一印象は良かったが、現在親しくない友人に対しては「まじめさ」が第一印象と現在の印象の間で大きく悪い方向に変化していた。それぞれ有意差が見られた項目を以下の図2に示す。

表4. 第一印象は良かったが、現在親しくない友人に対する印象の変化 (N=115)

	第一印象		現在の印象		t値
	M	SD	M	SD	
積極さ	3.15	.55	3.36	.56	3.63 ***
まじめさ	3.20	.54	2.83	.56	4.99 ***
責任感	3.39	.54	3.01	.71	4.86 ***

*** $p < .001$

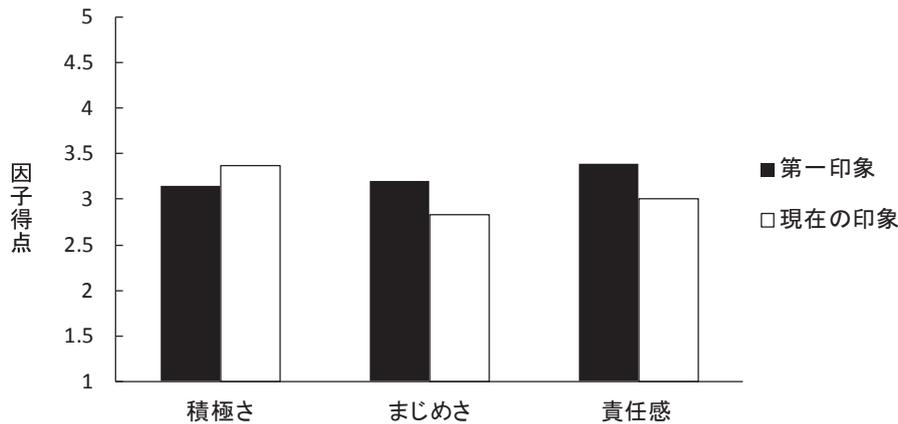


図2. 第一印象は良かったが、現在親しくない友人 印象ごとの平均値の比較

以上の結果から仮説1の第一印象と現在の印象には変化がある、は支持された。

II. 性別による第一印象とその後の印象の変化

第一印象は悪かったが、現在親しい友人を男性・女性に分け、再度因子分析を行った。その結果、男女ともに第一印象と現在の印象で「積極さ」、「まじめさ」、「やさしさ」の3因子を抽出することができた。信頼性を見たところすべての因子で $\alpha = .70$ を越えていたため、十分な信頼性が示された。第一印象は良かったが、現在親しくない友人においても同様に男性・女性に分け、再度因子分析を行ったところ、男女ともに第一印象と現在の印象で「積極さ」、「まじめさ」、「やさしさ」の3因子を抽出することができた。信頼性分析の結果、女性の現在の「やさしさ」のみ $\alpha = .65$ であったが、それ以外の因子については十分な信頼性が示された。

(1) 第一印象は悪かったが、現在親しい男性と女性に対する第一印象と現在の印象の差

第一印象は悪かったが、現在親しい男性と女性に対する第一印象と現在の印象との差を検討するために、因子分析で得られた下位尺度を用いて対象の性別ごとに t 検定を行った。その結果を表5に示す。

男性に対する評価では、「積極さ」($t(115) = 3.53, p < .01$)、「まじめさ」($t(115) = 5.71, p < .001$)、「やさしさ」($t(115) = 8.04, p < .001$)のすべてにおいて第一印象より現在の印象のほうが有意に高い得点を示した。特に男性に対しては「まじめさ」と「やさしさ」において第一印象はマイナスの評価だったが現在の印象ではプラスの評価に変わっていた。女性に対する評価では、「積極さ」($t(114) = 4.75, p < .001$)、「やさしさ」($t(114) = 9.52, p < .001$)で第一印象より現在の印象のほうが有意に高い得点を示した。特に女性に対しては「やさしさ」において第一印象はマイナスの評価だったが現在の印象ではプラスの評価に変わっていた。第一印象は悪かったが、現在親しい男性と女性に対しては、男性に対する場合も女性に対する場合も「やさしさ」が第一印象と現在の印象の間で最も大きく良い方向に変化していた。対象の性差についてみると、「まじめさ」に性差が見られた。男性の場合は変化があったが女性では変化が見られなかった。それぞれ有意差が見られた項目を以下の図3に示す。

表5. 第一印象は悪かったが、現在親しい男性・女性の友人に対する印象の変化 (N=114)

	男性					女性				
	第一印象		現在の印象		t 値	第一印象		現在の印象		t 値
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
積極さ	3.29	.90	3.52	.70	3.53 **	3.23	.91	3.63	.62	4.75 ***
まじめさ	2.84	.79	3.29	.71	5.71 ***	3.20	.78	3.35	.72	1.56
やさしさ	2.76	.82	3.51	.80	8.04 ***	2.80	.86	3.68	.71	9.52 ***

** $p < .01$ *** $p < .001$

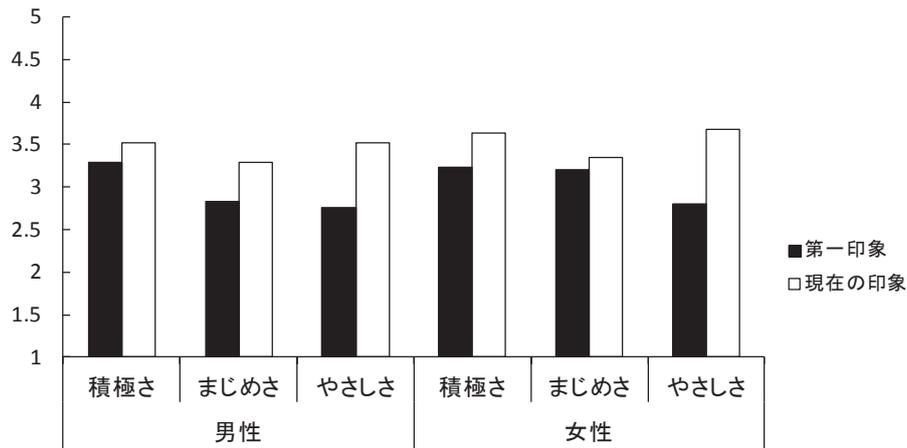


図3. 第一印象は悪かったが、現在親しい男性・女性の友人に対する平均値の比較

(2) 第一印象は良かったが、現在親しくない男性と女性に対する第一印象と現在の印象の差

第一印象は良かったが現在親しくない男性と女性に対する第一印象と現在の印象との差を検討するために、因子分析で得られた下位尺度を用いて対象の性別ごとに *t* 検定を行った。その結果を表6に示す。男性に対する評価では、「まじめさ」($t(119) = 6.18, p < .001$)、「やさしさ」($t(119) = 3.58, p < .001$)において第一印象より現在の印象のほうが有意に低い得点を示した。特に男性に対しては「まじめさ」と「やさしさ」において第一印象はプラスの評価だったが現在の印象ではマイナスの評価に変わっていた。また、女性に対する評価では、「積極さ」($t(118) = 5.57, p < .001$)において、第一印象より現在の印象のほうが有意に高い得点を示した。一方、「やさしさ」($t(118) = 8.87, p < .001$)においては、第一印象より現在の印象のほうが有意に低い得点を示し、悪い方向に変化したことを示した。特に女性に対しては「やさしさ」において第一印象はプラスの評価だったが現在の印象ではマイナスの評価に変わっていた。対象の性差についてみると、「まじめさ」と「やさしさ」に性差が見られた。「まじめさ」は男性に対しては変化した女性に対しては変化が見られなかった。また、「やさしさ」は女性に対して悪い方向に変化した男性に対しては変化が見られなかった。それぞれ有意差が見られた項目を図4に示す。

表6. 第一印象は良かったが、現在親しくない男性・女性の友人に対する印象の変化 (N=118)

	男性					女性				
	第一印象		現在の印象		<i>t</i> 値	第一印象		現在の印象		<i>t</i> 値
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
積極さ	3.20	.81	3.28	.71	.99	3.02	.78	3.43	.82	5.57 ***
まじめさ	3.25	.68	2.76	.83	6.18 ***	3.16	.74	3.18	.90	.23
やさしさ	3.29	.69	2.97	.73	3.58 ***	3.51	.61	2.78	.83	8.87 ***

*** $p < .001$

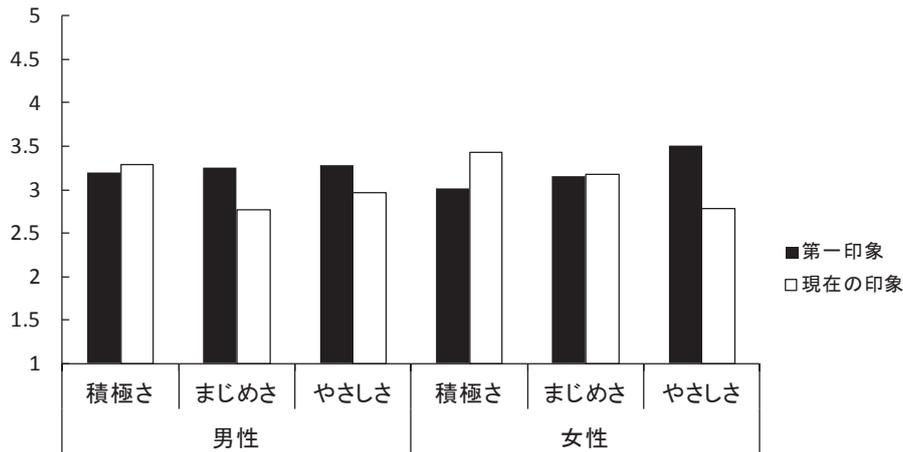


図4. 第一印象は良かったが、現在親しくない男性・女性の友人に対する平均値の比較

以上の結果から仮説2の第一印象と現在の印象には変化があるが、そこには性差がある、は支持された。

Ⅲ. 自己意識・自己評価と印象形成の関連

自己意識に関する項目と自己評価に関する項目に対し、それぞれ因子分析を行った。その結果、自己意識は合計2回の因子分析により、「私的自己意識」、「公的自己意識」、「外見意識」の3因子を抽出することができた。また、自己評価に関しても同様に因子分析を行い、「肯定的評価」、「否定的評価」の2因子を抽出した。さらに、信頼性分析を行いすべての因子で $\alpha = .70$ を上回っていることを確認した。それぞれの因子分析の結果を表7・表8に示す。自己意識における「私的自己意識」、「公的自己意識」、「外見意識」は男女共に非常に高いことが示された。また、自己評価における「肯定的評価」、「否定的評価」は比較的低いことが示された。それぞれから抽出された因子の平均値をもとに“平均値 $\pm 0.5 \times SD$ ”で高群と低群に群分けを行った。次に、印象評定の3因子について t 検定を行った。その結果、自己意識と自己評価の高低による差は見られなかった。よって、仮説3自己意識・自己評価の高低と印象の変化には関連がある、は支持されなかった。

表7. 自己意識における因子分析結果と因子間相関、 M 、 SD 、 α 係数

	私的自己意識	公的自己意識	外見意識	M	SD	α
問7 しばしば、自分の心を理解しようとする	.76	-.07	-.12			
問5 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する。	.68	.07	.06	3.71	.87	.71
問1 つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	.58	.02	.05			
問2 自分が他人にどう思われているのか気になる	-.01	.75	.00			
問9 自分の発言を他人がどう受取ったか気になる	.09	.68	.07	4.07	.73	.75
問6 世間体など気にならない	-.06	.54	-.25			
問3 髪型が自分の思い通りにいかないと気になる	-.11	-.15	.75			
問4 出かける前には、必ず身だしなみを確かめる	.17	-.12	.63	4.08	.78	.76
問8 自分の容姿を気にするほうだ	-.05	.33	.55			
因子間相関						
私的自己意識	—	.14	.26			
公的自己意識		—	.37			
外見意識			—			

表8. 自己評価における因子分析結果と因子間相関、*M*、*SD*、 α 係数

		否定的評価	肯定的評価	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
問15	自分はだめな人間である	.79	.01			
問13	自分は敗北者だと思う	.77	-.06	2.61	.91	.83
問11	自分は役に立たない人間だと思う	.72	-.04			
問10	自分は価値のある人間である	.10	.95			
問12	自分は色々な良い資質を持っている	-.15	.66	2.94	.99	.82
問14	自分は自信がある	-.15	.61			
	因子間相関	否定的評価	肯定的評価			
	否定的評価	—	-.59			
	肯定的評価		—			

考 察

本研究は、友人関係における第一印象としばらくしてからの現在の印象の変化について検討すること、また、性別や自己に対する意識や評価によって印象の変化に差が見られるのかについて検討を行うことを目的として行われた。

調査の結果、仮説1の第一印象と現在の印象には変化がある、は支持された。第一印象は悪かったが、現在親しい友人に対する印象評価と第一印象は良かったが、現在親しくない友人に対する印象評価の両方で「積極さ」「まじめさ」「やさしさ」「責任感」において第一印象と現在の印象に大きな変化が見られた。

仮説2の第一印象と現在の印象には変化があるが、そこには性差がある、も支持された。第一印象は悪かったが、現在親しい男性・女性に対する評価と第一印象は良かったが、現在親しくない男性・女性に対するそれぞれの評価の結果から、次のような第一印象と現在の印象の変化に性差が見られた。

第一印象は悪かったが、現在親しい男性に対しては現在のほうが「積極さ」「まじめさ」「やさしさ」のすべてにおいて印象がプラスの方向へと変化していた。特に「やさしさ」と「まじめさ」に大きな変化が見られた。これは、はじめ悪い印象を持たれていた男性でも、まじめで責任感があり、やさしさやにぎやかさをも兼ね備えていたことが後々理解され、友人関係が良い方向へと進展したと考えられる。

第一印象は悪かったが、現在親しい女性に対しては「積極さ」と「やさしさ」において印象がプラスの方向に変化していた。また、男性に対しての評価で変化が見られた「まじめさ」には変化が見られなかった。これは、はじめ悪い印象を持たれていた女性でも、にぎやかでおしゃべりなどの積極さがあり、やさしさや温かさをも兼ね備えていたことが後々理解され友人関係が良い方向へと進展したと考えられる。

また、第一印象は良かったが、現在親しくない男性に対しては「まじめさ」と「やさしさ」において印象がマイナスの方向へと変化していた。特に「まじめさ」においてはその傾向が顕著にみられた。はじめ良い印象を持たれていた男性でも、ふまじめでだらしく、冷たくて厳しい人だと思われてしまったために友人関係が悪い方向に進んでしまったのだと考えられる。

第一印象は良かったが、現在親しくない女性に対しては「積極さ」において印象がプラスの方向へと変化し、「やさしさ」ではマイナスの方向へと変化した。女性に対しては「積極さ」は友人関係の進展にプラスにも働くが、あまり積極的すぎるとかえって友人関係を悪い方向に進めてしまう要因にもなることが考えられる。はじめ良い印象を持たれていた女性でも、にぎやか過ぎたりおしゃべり過ぎたりしたことによって友人関係が悪い方向へと進んでしまったのだと考えられる。以上のように、男性に対してと女性に対してでは友人関係の進展に影響する要因が異なっていた。男性に対しては特に「まじめさ」が友人関係の進展に影響を与えることが分かった。男性はまじめさがあると判断されれば友人関係は良くなり、まじめさがないと判断されれば友人関係は悪くなると考えられる。男性に対しては「積極さ」が友人関係を良い方向に進展させる影響を与えるということがわかった。女性に対しては特に「やさしさ」が友人関係の進展に影響を与えることが分かった。女性に対してはやさしさがあると判断されれば友人関係は良くなり、やさしさがないと判断されれば友人関係は悪くなると考えられる。また、「積極さ」があることで友人関係を良い方向にも悪い方向にも進めることに影響を及ぼすことが示された。このような男性と女性では好まれる特徴が異なるという結果は、豊田（1998、

2000) が示した結果と合致している。

自己意識及び自己評価と印象の関連性についてみると、自己意識は非常に高いことが示され、「私的自己意識」「公的
自己意識」「外見意識」のいずれにおいても高い傾向が示された。一方、自己評価は男女共に比較的低いことが示され、
「肯定的評価」「否定的評価」いずれにおいても低い傾向が示された。日本人の自己評価の低いことは鹿内（1978）の従
来の知見と合致している。

仮説3の自己意識・自己評価の高低と印象の変化には関連がある、については、調査の結果支持されなかった。自己
意識・自己評価の高い人と低い人との間では相手に対する印象に差が見られなかった。永房（2008）は自己評価が高い
人は他者からの評価が脅威に感じられ、他者に対して負の感情を抱くとしているが、本研究の結果はそれとは異なり、
大学生における友人関係には自己評価の高低との関連は明確には示されなかった。

本研究では、自己意識・自己評価と印象形成の関係性を探ることを目的の一つとしたが、結果は明確ではなかった。
調査対象者をさらに増やしたり、異なった集団に所属している人を対象にすることを今後の研究課題としたい。

引用文献

- 橋本令子・内藤章江・加藤雪枝（2007）. シミュレーションを用いた衣服の模様の印象評価 相山女学園大学研究論集
（自然科学篇）, 38, 91-101
- 石川真（2003）. 対人認知の印象形成モデルに関する研究 上越教育大学研究紀要 23, 1, 24-33
- 梶田叡一（1966）. 2者関係に及ぼす自己評価の影響 教育社会心理学研究, 5, 231-238.
- 梶田叡一（1967）. 自己評価と自己のパフォーマンスの評価 心理学研究, 38, 2, 63-72.
- 吉川肇子（1989）. 悪印象は残りやすいか？ 実験社会心理学研究, 29, 1, 45-54.
- 永房典之（編）（2008）. なぜ人は他者が気になるのか 一人間関係の心理— 金子書房
- 鹿内啓子（1978）. 成功失敗の帰因作用に及ぼす self-esteem の影響. 実験社会心理学研究, 18, 35-46
- 豊田弘司（1998）. 大学生における嫌われる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 34, 121-127.
- 豊田弘司（2000）. 大学生における好かれる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, 36, 73-76.
- 山田奈津子・箱田 裕司（2000）. 印象形成研究の歴史と展望 人間科学, 6, 35-45.
- 吉村英（1987）. 対人認知における体制化のメカニズムと印象の残りやすさに関する研究. 実験者社会心理学研究, 27,
47-58.

（本論文は、高橋優希の2013年度卒業論文のデータを再整理し、新たに作成したものである）